



魅力ある 教育現場に



教育学部同窓会副会長
近藤 幸栄

私が新潟大学教育学部を卒業した三十六年前、私の周りの教育学部卒業の友人はほとんどが教員となった時代であった。また、全国平均であるが、昨年十二月末の報道によれば、二十五年前ごろ小学校の教員採用倍率は約十倍であった。

今は、新潟大学教育学部を卒業しても、教員を目指す学部生は六割程度と聞いている。教育現場では、教員の多忙化等も相まって、「教員不足」が喫緊の課題となっている。

学校は魅力のない職場となってしまうているのだろうか。新潟県でも令和六年度教員採用倍率が、昨年度より若干上昇したようだが、二倍程度と厳しい状況のようである。

「教員不足」は、教員採用時の問題だけでなく産休や病休を取得してもその代替となる講師がほとんどいないという面にもつながる。教員採用選考検査の受検者の内訳を見てみると、新卒者より既卒

者の受験者が多い状況のようである。そんな中では年配の方も新採用として採用されていくことになり、講師不足にも一層拍車がかかる状況になっているようである。

しかし、教育は「人をつくり、地域をつくり、未来をつくる崇高な営み」である。変化の激しい、予測不能な社会ではあるが、これからの明るい未来を切り拓いていくのは子どもたちである。そして、この子どもたちに生きる力を育むのが教員としての崇高な仕事である。そして、やりがいのある魅力的な仕事でもある。

教育現場が一層魅力あるものとなり、新潟大学教育学部から多くの教職を志す学部生が増えることを期待するとともに、今現場にいる我々が、子どもたちのため、そして、教員を目指す教育学部を卒業する後輩のために尽力しなければならぬと思ひ、思案を巡らせている。

花鳥風月

現在、新潟県と新潟市で採用されている国語の教科書には、「創造」というタイトルが付いています。この意味や価値はどこにあるのでしょうか。

授業の目的は、資質・能力を身に付けさせることです。国語は、主に教科書の題材を通して、知識及び技能、思考力・判断力・表現力等、学びに向かう力・人間性等を育みます。違う性格の人物とすれ違いが生じたとき。抽象的な物事に対峙するとき。他者との関わりの中で自己の生き方を模索するとき。時間やメディアの存在を考へるとき。歴史的な産物や壮大な自然に畏敬の念を覚えるとき。

題材をただ教え、到達度を測るのではなく、タイトルと結び付けて「あなたはどのように未来を創造していきますか。」と一貫して問うとしたらどうでしょう。この問いには、テストで測れる力で答えることはできません。

資質・能力を身に付けさせることは大切でテストも同様です。しかし、題材の内容性に触れ、一貫したテーマで子どもに問い続けるならば、新たな未来を豊かに創造する力を養うことにもつながるのではないのでしょうか。

(広報部 国井 恒太郎)

情報
交換

情報
発信

新潟大学
教育学部同窓会
ホームページ



学校紹介

①

災害や困難に強い学校や地域を創る

新潟市立木戸小学校

一 能登半島地震で千人が避難

令和六年は能登半島地震で幕を開けました。新潟市東区は震度五強の揺れがあり、津波警報の発令とともに、当校は避難所を開設しました。約千人の地域住民が整然と避難をして、翌朝まで避難所を運営しました。木戸地区の皆さんの防災意識の高さを感じました。当校の百五十年間の歴史の中でも、新潟地震の際には、学校に数週間に渡って地域の人々が避難したそうです。大きな災害を地域住民とともに乗り越えてきた歴史があるから、整然とした避難ができたのでしょう。本稿では防災の面から木戸小学校を紹介します。

二 地域合同での避難訓練

十月にはコミュニティ協議会主導で地域合同の避難訓練を実施しました。自治会ごとに避難経路を確かめながら学校に避難をします。学校に着いたら非常階段から屋上に上がり、津波避難のコースを確かめます。この度の地震では、この訓練が大変有効でした。そのイメージがあったからこそ、多くの方がすばやく避難できたのでしょう。

六月に実施する地震想定避難訓練と引き渡し訓練も、地域の皆さんの協力を得て実施しています。当校は非常時には外部に設置した非常階段の入口

を蹴破って屋上（四階）まで一気に上がることが出来ます。屋上スペースは広く、避難所備蓄倉庫も四階にあります。これらは利用する人が機能を知ってこそ価値があり、日頃の訓練を通して周知を図っています。

三 子どもは総合で防災を学習

四年年の総合的な学習の時間では、災害や避難の方法について学習をしています。避難所で使用する段ボールのベットに寝てみたり、ベットを同伴したときの避難の仕方などを体験を通して学習したりしています。また、全学年で発達段階に応じて災害や避難について学習しています。今回の避難では、子どもが「避難しよう！」と大人に積極的に話したそうです。子どもの頃からの学習が重要であることを再認識しました。



四 ふだんから学校と地域と一緒に

当校は地域の方々が学校にとっても協力的です。訓練だけでなく、日頃から

顔の見える範囲でおつきあいがあることは心強いことです。放課後や土曜日に子どもが遊ぶスペースを提供する「木戸つ子ゆめ広場」があります。当日の運営や子どもの見守りを、地域の方々が支えています。三学年が木戸の歴史を学習するときには、歴史に詳しい方に先生となって教えてもらうなど、地域の方が学習に参加する場面が多いです。多くの方が学校に関わっていることは、災害などのときに特に心強いことです。



五 七色の風船のように

当校は本年度に百五十年を迎えたことを記念して、大運動会の開会式には、全校児童で様々な色の風船を一齐に空に放ちました。五月晴れの空に七色の風船が高く飛んでいく光景はとても美しく、子どもと職員と地域の皆さんが風船をじつと見つめる光景は幸せがいっぱいでした。このような幸せが続くように、災害や困難に強い学校や地域を創っていかうと決意を新たにしました。

（文責 校長 貝沼 浩晃）

令和五年度

会務報告

令和五年

入学式

教育実践学研究所

入学ガイダンス

令和四年度会計監査会

（アートホテル新潟）

第一回本部会

【評議会に向けての議案
審議、決定】

評議会

【令和四年度会務報告・
決算報告】【令和五年度活動の重点
・専門部活動計画・役員
及び予算案承認】

教育新報「第185号」発行

カミングホームデイ

（ホテルサンルート新潟）

第48回同窓生の集い

（アートホテル新潟）

全学同窓会交流会

（ANAクラウンプラザホテル

令和六年

大学教職員と同窓会との
懇談会・懇親会

（アートホテル新潟）

教育新報「第186号」発行

第二回本部会（実施予定）

卒業式・祝賀会

3・25 3・2 2・20 1・18 10・21 9・16 8・5 7・20 6・3 5・6 4・14 4・5 4・3

学校紹介 ②

地域と生徒が共に歩む学校

長岡市立刈谷田中学校

長岡市立刈谷田中学校は、長岡市の東部に位置し、東西に山に囲まれた自然豊かな地域にあります。

平成元年度に開校し三十五年目の学校になります。今年度は、全校生徒百五十三名、九学級（特別支援学級三学級を含む）となっています。

生徒は、純朴で素直であり、我々教職員は生徒一人一人を温かく見守りながら日々の教育活動を行っています。

一 地域と共に歩む学校

栃尾の伝統文化を大切に後世へ受け継いでいく教育活動を総合的な学習の時間を中心に取り組んでいます。

一年生は、栃尾の歴史や自然環境について理解を深める活動と共に地域の伝統文化である「てまり」を地域の方から教えてもらい製作しています。二年生は、上杉謙信の旗揚げゆかりの地であるお寺で「義の元服式」を行ったり、修学旅行に向けて、「栃尾」と「京都」の比較を行ったりしています。三年生は、自分が住む町「栃尾」の活性化に必要なことを取材などを行い、活性化プラン作りを行っています。

学校全体としては、六月に刈谷田中学校区の小・中・地域が一丸となり、各地区で、ゴミ拾いや公園掃除、集会所の掃除、花の苗植えなど地域貢献活動として取組を行っています。

八月には、地域の方から「栃尾甚句」を学び、とちお祭では、「大民踊流し」に参加しました。

九月には刈谷田中学校の卒業生が栃尾を活性化したい思いから始まった「トチオノアカリ」で生徒や保護者がメッセージを書いたものを町に展示し、地域の盛り上げに貢献しています。



二 ライオンズクエストを活用したスキルトレーニング

当校では、より良い人間関係を築くことができる生徒の育成、ライフスキルの力を培うことを目的として、ライ

オンズクエストを活用しています。学活や総合的な学習の時間など年八時間設定し、発達段階に応じた九つのライフスキルを身に付けるように取り組んでいます。

ライオンズクラブの協力を受けて、長岡市立堤岡中学校と交互に、職員はこのプログラムを活用するための研修を夏季休業中に受講し、指導者としての認定を受けて生徒の指導にあたっています。

これからも生徒が栃尾に誇りをもち、地域と連携して、よりよい町づくりを目指すよう教育活動を推進していきます。



（文責 教頭 高橋 淳一）

事務局だより

会員の皆様へのお礼とお願い

今年度はコロナウイルス禍もようやく収束に向かい、予定していた行事もすべて実施することができました。公私ともにご多用の中また遠方からのご参加、誠にありがとうございました。心からお礼申し上げます。

さて、皆様もご存じのことと思いますが、今、ハガキや封書の値段が大幅に上がるニュースがさかんに報道されております。加えて今年の二月一日からヤマト運輸と郵便局との業務提携により郵送業務が大きく変わろうとしており、同窓会の事業にも多大な影響が出ると予想されます。

そこで、会員の皆様から是非ご協力いただきたいと思っています。

- ① 年度末の確実な引継ぎをお願いします。（ファイル作成等）
- ② 同窓会のホームページやメールの一層の活用をお願いします。
- ③ 住所等が変更されましたら速やかにお知らせください。
- ④ 永年会員資格の確認をお願いいたします。あくまで入学時に永年費を納入し、会員証を受理した人が対象です。
- ⑤ 教育学部の会費は千円です。全学同窓会費（二千円）と間違わないようにしてください。

第四十八回

同窓生の集い報告

研修副部長 小泉 慎子

九月十六日、アートホテル新潟駅前において同窓生の集いが開催されました。「第二のふるさと新潟の学び（新潟での学び）」と題して、新潟大学教育学部教授の岡村浩様よりご講演をいただきました。

一 講演会

○岡村浩様 プロフィール

岡村浩（雅号・鉄琴）様は埼玉県川越市ご出身です。新潟大学教育学部の卒業生でられます。

新潟大学大学院教育学研究科修士課程を修了され、現在、新潟大学教授（教育学部・経済科学部・大学院現代社会文化研究科）でおられます。その他にも、全国大学書写書道教育学会理事、日本教育大学協会書道部門委員、越佐文人研究会代表でおられます。

研究分野は、書写書道教育、現代の書表現、良寛や会津八一を中心とする近世以降新潟県ゆかりの書画文芸を研究されています。

岡村鉄琴という筆号雅号でもご活躍であり、新潟日報でご執筆中です。

○講演

講演は、現在の新正門に刻まれた横文字の「新潟大学」の文字が書道



科教員の竹内臨川先生（一九〇七～一九八六年）の肉筆文字を基に刻んだものであるというお話から始まりました。昭和五十七年に五十嵐キャンパスができた

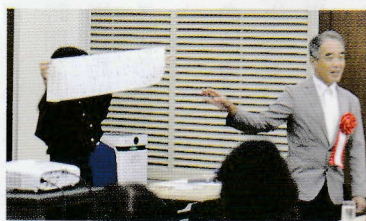
時の正門に縦書きで刻まれたものが、今の横書き主流を受けて四文字を新たに横組みにして新正門に使ったのだそうです。「これからも竹内先生の文字がずっと使われ続けることを願っています。」と岡村様は話されました。

印象的だったのは、岡村様の人生の節目での「宝物の手紙」のお話でした。初めは、戦後新大書道科創設者で初代教授の石橋先生のお手紙についてでした。岡村様が大学院一年生の時に冊子を石橋先生に贈呈なさり、それに対して当時九十二歳の石橋先生が格調高い謝辞のお手紙をくださったのだそうです。岡村様にとって初めての候文でした。印刷でしたが濃淡の墨美や迫力ある筆勢の素晴らしいお手紙を、私たちも拝見させていただきました。石橋先生は、身近な生活に根差した用美一体の書を目指して「親和様の書」を提唱され、その入り口は手紙だとおっしゃられたそうです。

次は、岡村様が難関を突破されて新大書道科に合格された後、三月に慣例で、書道科の先輩が巻紙にお祝い文を送ったため送ってくださったお手紙に

ついてです。初めての巻紙、やる気を喚起させる文面、美しい墨書。実は、都会育ちの岡村様は、入学が決まっても内心新潟の地へ行くのを渋っていたのですが、この先輩の巻紙が、都内の大学への未練を見事に断ち切ってくれたそうです。その先輩は、現在京都にお住まいだそうです。岡村様は巻紙を教材として学生に教えていることを、先輩にお手紙でお伝えしたそうです。すると先輩から、右手が動かず今は左手で書いているとのお返事が届いたと話されました。

続いて岡村様が新大にご入学後、ご祖母様やお母様が心配なさって書かれたお手紙についてご紹介がありました。真心のこもった文章でした。新潟に引っ越されて間もなく、書の先生でいらつしやるお母様からのお手紙は大変な達筆で、文章も「仕送りは間に合うから安心して生活してください。」等、子を想う親心にあふれた素晴らしい内容でした。岡村様を大変可愛がられたご祖母様のお手紙は、「新潟になれて来たそうで：」や「皆がやって居るのだからがんばってね」、「かげながらおばんもおーえんして居るからね」等、



名な手紙と通じるものがあります。」と話されました。私もすぐにシカの手紙が思い浮かび、全く同感致しました。その他にも数々の貴重なお手紙を見せていただきました。岡村様は「手紙はメールと違いやり取りが残るありがたい文化」とおっしゃっていました。また次の三つの事柄を大切に「書文化」を提案されました。①お習字としてだけでなく暮らしの中で活用できるようにする。②書くだけでなく調べる行いも大切に。③調べたことを人前で話す。これら三位一体となった「書文化」を広めたいと話されました。書道の奥深さを分かります。お話しくださり、多くの学生からも慕われ、岡村様のお人柄を感じられた素晴らしい講演でした。

二 懇親会

新型コロナウイルスの五類への移行を受け、今年は二十余名の参加人数で懇親会を行いました。感染予防対策は引き続き徹底して行われました。

- (一) 開会の挨拶 白杵 勇人 会長
(二) ご祝辞 新潟大学教育学部長 藤林 紀枝様

教育実践学研究科長 高木 幸子様

- (三) 乾杯 藤井 保男 顧問
(四) 開宴 岡村浩様よりご挨拶

- (五) 万歳三唱 斎藤 寿一郎 顧問
(六) 閉会の挨拶 小泉 浩彰 副会長

今回の同窓会も、以前のように多くの方々とともに開催できることを願っています。

全学同窓会交流会報告

広報部 若月 利春

令和五年度新潟大学・全学同窓会交流会が十月二十一日（土）にANAクラウンプラザホテル新潟三階「飛翔」で開催され、記念講演と研究報告が行われた。

牛木学長の開会挨拶では、本学が令和六年度に創立七十五周年を迎えることを受け、「自律と創生」の理念、「新潟大学将来ビジョン2030」について改めて語られた。

記念講演では、「ドナルド・マクドナルド・ハウスにいがたについて」を演題に、にいがたハウスマネージャの稲川欣也氏より講演をいただいた。



「ドナルド・マクドナルド・ハウス」は、「病氣と闘う子どもとその家族が『わが家のようにくつろげる第二の家』」をコンセプトに、実家に帰ってきたような温かな雰囲気大切にしている。「にいがたハウス」は、その国内十二か所目の「ハウス」であり、日本海側では初となる。

「ハウス」のミッションは、自宅から離れた病院で難病と向き合う子どもたちとその家族が二重生活になる経済的負担と家族が離れて暮らすことによる精神的負担を軽減することである。

その運営は主にボランティアスタッフが担い、「にいがたハウス」には、現在二百二十名が登録しているそうである。会場に参加していたボランティアアさんから生の声を聞くこともできた。

研究報告では、「小児患者の自立支援・自己開示の大切さ」という演題で、新潟大学医学部保健学科教授住吉智子氏から研究報告があった。

子どもの慢性疾患には、復学の課題や容姿の課題、周囲の認識に悩むストレスが生じるが、自分の疾患の症状等を理解して、それを受け入れた上で必要なことを他者に伝えることで、心地よい良い環境を自分で作ることが、慢性疾患の子どもたちの対人関係の目標であるとのこと。



自己開示は心的外傷からの人間的成長（PTG）につながる。

人生のあらゆる場面で必要とされる自己開示を年齢ごとにどうすることが最善なのか、疾患とともに生きていく子どもたちの自己開示のための支援や基盤・環境づくりについても考えることができた報告であった。

教育学部・教育実践学研究科教職員と同窓会との懇談会・懇親会 報告

交流部長 諸橋 智

1月18日（木）、アートホテル新潟を会場に、新潟大学教育学部・教育実践学研究科教職員と同窓会との懇談会・懇親会を開催しました。

学部並びに教育実践学研究科からは、藤林紀枝様・高木幸子様を始め11名の教職員の皆様から、同窓会からは白杵勇人会長以下12名が出席しました。今年度を総括する事業であり、有意義な情報交換が行われました。



懇談会では、白杵同窓会会長から、社会情勢を背景とした教育界の課題や同窓会創立75周年に向けての挨拶がありました。学部長の藤林様並びに高木様からは、

教員確保に向けた学部の取組が、着実に成果を上げている点や、教育実践学研究科の学び合う集団の中で力を付け、現場で活躍する修了生の姿についてお話をいただきました。

同窓会からは、各専門部等（事務局・研修部・広報部・組織部・交流部）が今年度の事業概要について報告を行いました。最後は、小泉浩彰同窓会副会長の「大学と現場と、これをつなぐ大

学院が三位一体となり、それぞれが魅力を高められるよう同窓会は支援していきたい」という熱のこもった挨拶で会を閉じました。

懇親会では、堀竜一副学部長様から乾杯のご発声を皮切りに懇親を大いに深めることができました。懇談会での話題を基に新潟の教育の現況や未来の在り方など、双方の夢や願い、今後の期待など幅広い情報を交わし合いました。

締めくくりは、教育実践学研究科副科長相庭和彦様から氣勢を上げていただくとともに、小林由希恵同窓会副会長の挨拶で会を閉じました。

なお、本年度のカミングホームデイは、ホテルサンルート新潟において、夏のホテルランチを囲んで行われました。総勢16名で楽しいひと時を過ごすことができました。

組織部と連携をして事業を進められたことで、来年度はさらに多くの皆様からご参加いただき、つながりを広げられることが期待できそうです。



会員の広場

力量を伸ばす



阿賀野市立安田小学校

加藤 光

前に立つだけで学年全体の視線が一点に集まる。姿勢が整う。発する言葉一つ一つに力があり、思いが伝わる。私が尊敬するベテランの先生はまさに空間の支配者だった。どうやってその域に達したかを問うても「経験だね」の一言だけ。その域に達するイメージは今の私にはまだもてない。

「経験値＝年数×質」。良質な経験を積むためにはこの等式を意識することが大切だ。年数は平等なため、いかに質の高い時間を過ごすかを考える必要がある。

質の高い時間を過ごすために取り組んでいることがある。それは読書と旅行だ。読書は週五冊、旅行は行ったことのない場所に月一回が目標だ。読書で得た感動した言葉や旅行で得た知識や見聞を子どもたちに伝えていく。まだ手探りではあるが少しずつ経験値がたまっていく。空間の支配者への道はまだまだ険しいが、この取組を継続し、教員としての力量を伸ばしていきたい。

頑張れ、受験生



関川村立関川中学校

金子 浩

この原稿を書いている今日は、「大入学共通テスト」一日目である。私の大学入試はもう三十年以上も前の話だが、受験へのプレッシャーや緊張、受験番号を見つけたときの光景など、今でもよく覚えている。しかし、新聞に掲載される入試問題を毎年見てみると、こればかりはまったく分からない。こんな難しい問題に挑戦している受験生に感心する。

ところで、当時の私は受験に失敗し、予備校に通いながら、一年間浪人生活をしていった。浪人生活というところあまり明るイメージではないかもしれないが、この一年は私の人生の中でも一番と言っているほど充実していたと思う。予備校に通っている人たちはみな、「大学合格」という同じ目標をもっている。だから、仲間であり、ライバルでもあった。目標を同じくする仲間がいたから頑張れたと思う。

毎年この時期になると受験生を応援せずにはられない。頑張れ、受験生。

新たな挑戦



新潟市立和納小学校

浅倉 健輔

新型コロナウイルスが猛威を振るった三年間。もともと出掛けることが好きだった私だが、人混みの中に行くのを躊躇い、なんとも歯がゆい思いをしていた。そんな時に出会ったのがスポーツバイクである。

元々スポーツバイクに興味を持っていた私は、近くの店で見つけたクロスバイクに一目惚れし、即日購入。サイクリングに勤しむことになった。

目的地での活動がメインである車と違い、自転車は目的地までの道のり全てが旅となる。見事にのめりこみ、新潟シテイライドへの参加や、佐渡や十日町などに自転車旅行などに出かけることもできた。

まさか年齢四十で新たな趣味ができるとは思わなかったが、新たな挑戦は新たな出会いと感性を生む。知らなかった人と出会い、知らなかったことを知り、それが仕事にも生かされた。このような出会いをこれからも大切にしていきたい。

チーム藤塚小



新発田市立藤塚小学校

山田 耕世

勤務校である藤塚小学校は、令和六年度末に閉校になり、紫雲寺小学校と米子小学校と統合し、新生「紫雲寺小学校」になることが決まっている。現在は閉校と開校の準備を同時に進めているが、改めて藤塚小学校の素晴らしさを感じている。

何よりも子どもたちが素晴らしい。日々、いろいろなドラマがあるが、どの子どももよりよい自分になるように精一杯頑張ろうとしている。また、学年をこえて人を思いやる気持ちをもっている姿がたくさん見られる。また、今年度、六年生は、「藤ハロ（ハロウィン）」や「クリスマスコンサート」など、全校が一体感を感じながら盛り上がるイベントを新たに創り出した。創造力や発想力が本当に素晴らしい。

子どもたち一人一人にとって、藤塚小学校で過ごした日々がかけがえのないものとなるように、今後も「チーム藤塚小」でスクラムを組み、取り組んでいきたい。

教職大学院生 1年目の実践報告

知的障害特別支援学校において子どもが運動時に楽しさを感じる授業実践～高田典衛楽しさの四原則に着目して～ 教育実践開発専攻ストレートマスター 熊田 さくら

本研究は、知的障害特別支援学校において、子どもたちが豊かなスポーツライフを実現するための素地を養うために、楽しさに着目した実践を行った。運動の楽しさについて、高田典衛(1985)は、4つの原則があると述べている。それは、「動く楽しさ」「集う楽しさ」「解る楽しさ」「伸びる楽しさ」である。

今回私は、子どもが授業内で楽しさを感じられるためにどのような工夫が必要か明らかにすることを目的とした。そのために、楽しさの四原則1つ1つに着目した実践を行った。

実践①「動く楽しさ」に着目した実践

特別支援学校小学部で体育授業の実践を行った。内容は「動く楽しさ」に着目し、サーキット運動で、特に「児童が動きなくなる環境構成」の工夫をした。その結果、児童が活動に取り組む時間が増え、体を動かす様子が見られた。課題は、動く楽しさを感じるとともに、もっと運動がしたいと思う達成感、充実感を大切に工夫が必要であった。

実践②「伸びる楽しさ」に着目した実践

特別支援学校中学部3年生で実践を行った。内容は、朝の運動という、ウォーキングもしくはランニングを20分間行っている時間を使い、「伸びる楽しさ」に注目し、歩数計をつけて生徒の運動量を可視化できるようにした。さらに、活動後にプ

ログラミング教材であるScratchを用いて、振り返りを行った。その結果、伸びる楽しさを実感し運動量が増加した生徒が1名いた。他の生徒も運動量の可視化と結果のフィードバックにより、活動に対する意欲が高まった様子が見られた。

実践③「集う楽しさ」に着目した実践

特別支援学校中学部2年生で実践を行った。実践②と同じく、朝の運動の時間で行った。「集う楽しさ」に着目し、生徒の周回数を可視化できるようにカウンターを導入した。さらに、活動後iPadを用いて個人で行う振り返りと、集団でシートを用いる振り返りを行った。集団の振り返りでは全員の周回数に応じてシールを渡し、一つのシートにためていく活動を行った。集団で周回数を振り返ることで、相互評価が可能となる。その結果、活動に対する意欲が高まった生徒が2名見られた。

3つの実践を通して、「環境構成の工夫」「運動量の可視化」「振り返り」の3点が効果的であったと考えている。そして、子どもたちが楽しく運動をするためには、まず根底に動く楽しさの保証をすることが重要だと私は考える。

今後は、「解る楽しさ」についての実践を行っていき、子どもたちが豊かなスポーツライフを養うために、教師としてどんな支援ができるか、省察を深めていきたい。

学校にいくと、日々ドラマを見るような気がする。子どもたちは、昨日できなかったことが、今日ではできるようになる。二学期までは自分中心だった子が、三学期には友達に目を向けられるようになっていく。そんな姿を見るたび、胸が熱くなる。

四月、私は初任で小学校二年生の担任として勤務し始めた。当初は、子どもの言動に一喜一憂して、週に三度涙を流した時もある。

しかし、そんな私も、今では学校がとても楽しい。周りの先生方や子どもたちを頼れるようになり、子どもがくれる感動に心から笑えるようになった。そんな自分の成長も、またドラマのようだと感じている。

「何が起るかわからない」と、未だ毎朝足が震えるが、不安も感動も教師という立場がくれるかけがえないものだと思ひ詰めていきたい。



加茂市立加茂小学校

鈴木 若那

ドラマのような日々



十日町市立十日町小学校

柳 愛子

パワーチャージ

社会人になり、土曜日と日曜日という休日の捉え方が大きく変わった。小学校から高校までの休日は部活動に専念し、練習や大会に挑んでいた。大学生では、授業がオンラインとなり、休日は特別な休みではなかった。小学校から大学までは、平日とあまり差のない休日であった。

今年社会人となり、休日の価値の違いを感じる。買い物したり、友達と会ったり、ゆっくり休んだり、好きなことをして過ごす。平日とは違う充実感がある。そして、「今週頑張ったなあ。来週も頑張ろう」と思える大切な時間だ。今の私にとって土曜日と日曜日という休日は、パワーをチャージする時間である。

子どもと過ごす毎日はとても魅力的である。悩むことはあるが、「子どもはかわいいなあ」と心躍る瞬間を感じられる。チャージしたパワーでこれからも子どもたちと向き合っていきたい。

会員の広場

大学の
コーナー

学校音楽教育からみる地域の特徴

新潟大学教育学部 准教授 工藤 千晶

私は今年度より新潟大学教育学部音楽教育専修にまいりました。専門は音楽教育学で、本学着任までは、岡山で保育士、幼稚園教諭、小学校教諭の養成に携わっていました。このたび、中国地方から新潟に移り、自然や文化の違いを感じる中で、教育における地域性というものを改めて考えるようになりました。そこで、本稿では学校音楽教育からみる地域の特徴について取り上げてみたいと思います。

まず、音楽科において地域の特徴があらわれる場面のひとつに、各地のわらべうたや民謡、郷土の音楽などを扱う授業があげられます。例えば、小学校の音楽教科書には、日本各地の民謡や郷土芸能の一覧が掲載されています。ここで着目したいのは、その一覧とともに、「みなさんの住んでいるところには、どのようなものがつたえられていますか。」（小原光一監修、二〇二二、三〇頁）や、「みんなの住んでいるところには、どんな歌があるかな。」（新実徳英監修、二〇二〇、三六頁）という問いが示されていることです。

このような視点から、新潟の小学校や中学校ではどのような授業が実践されてきたのか、新潟の先生方にお話をうかがいつつ、これまでの研究授業の

資料等を拝読すると、新潟甚句、長岡甚句、佐渡おけさ、鬼太鼓、新潟樽砵さらには各地区に伝わる祭囃子や踊りなど、県内の様々な文化・芸能が教材として扱われており、これらをいかに継承していくか、学校と地域が一体となって取り組んできたことが見て取れます。

次に、中国地方の学校音楽教育について、地域性を視点として振り返ってみると、例えば私自身が広島の小学校で受けた平和教育と関連した音楽教育が特徴的なものとしてあげられます。私の経験を申し上げると、小学校では夏になると平和集会がひらかれ、そこで平和の歌、特に原爆の歌を歌う時間が設けられていました。平和記念公園で歌った年もあります。毎年違う歌を歌いましたが、いずれも学級活動や音楽の授業で練習し、歌詞とメロディーを覚えるまで歌いこみました。これらの歌は、今でも記憶に刻み込まれています。

また、広島は神楽が盛んで、神社の他、文化センターや公民館、学校の体育館でも公演されています。このような土地柄、幼稚園から高校までの間に神楽の体験が行われることもあり、なかには、神楽クラブが設けられている学校もあります。

以上のような広島での取り組みは、もしかすると新潟の皆様からしたら特殊なものにみえるかもしれませんが、さらに言えば、先に申し上げた小学校の音楽教科書に示されている日本各地の民謡や郷土芸能の一覧の中で、新潟県のものとして紹介されている「佐渡おけさ」は聞き覚えがあっても、広島県のものとして紹介されている「音戸の舟歌」や「壬生の花田植」には馴染みがないかもしれません。

このように、その地域、つまり自分たちにとつては馴染みあるものが、他者にとつてはそうではないかもしれないということ念頭に置きつつ、自分たちが大事にしているものを他者と共有できるように、またその逆も受け入れられるような土台をつくるのが、学校音楽教育で地域性を扱うひとつの意義になるのではないかと思います。

最後に、地域の特徴がでるものとして、小学校教員採用試験についても言及したいと思います。ただ、音楽実技についてはコロナによって実施中止になったものが多くありますので、ご紹介するのはコロナ以前の傾向になります。ここをご承知おきください。

私はこれまで、前所属大学の学生が受験する自治体の音楽に関する小学校教員採用試験の傾向をみてまいりまし

た。中国・四国地方を中心に、様々な自治体の傾向をみる中で、特に印象に残っているのは沖縄の採用試験です。過去問をみると、音楽を専門としない学生にはかなり難易度の高い楽典の問題が出題されていました。そのため、沖縄の採用試験を受ける学生の中には、授業以外で音楽理論を熱心に勉強する学生もいました。

音楽実技の試験についても、周知のことと存じますが、課される内容は自治体によって大きく異なり、音楽の実技試験自体が課されないところから、広島のように、オルガン演奏（バイエルより一曲）、ソプラノリコーダー演奏、歌唱を課するものまで多様であり、各自自治体に即した試験対策が必要でした。

なお、音楽科教員養成という立場からみると、このような採用試験の相違と併せて、小学校における音楽専科教員の配置に関して差がみられることも、おさえておきたいポイントです。

以上、学校音楽教育からみる地域の特徴について、簡単にではありますが述べさせていただきました。これから新潟という地域に根ざした教育が行えるよう努めていきたいと思っております。どうぞよろしくお願い申し上げます。

【引用文献】

- ・新実徳英監修（二〇二〇）『小学音楽 音楽のおくりもの5』教育出版
- ・小原光一監修（二〇二二）『小学生の音楽4』教育芸術社